

「地域に生かされているということ意識して活動する」

全 国に放送局を置き
「地域放送の充実」を掲げるNHK

地域の視聴者の声と受信料に支えられて、
私たちは、

どのように地域の声に応えていき、
地域との関係をどのように築いていくか。
これは私たちの永遠のテーマです。

私たちと同じテーマを掲げるプロスポーツ。
それはサッカーのJリーグです。
今回は7年ぶりにJ1復帰を果たした、
ベガルタ仙台の手倉森誠氏に聞きました。



手倉森 誠 サッカーJ1 ベガルタ仙台監督

プロフィール

1967年生まれ。Jリーグ・ベガルタ仙台監督。現役時代はスループ
ストとフリーキックを得意とするMF。2004年からベガルタ仙台のコー
チを務め、2008年から監督。2010年に7シーズンぶりのJ1復帰
を果たす。

インタビューに至るまで

全国に放送局を置き、「地域放送の充実」を掲げるNHK。
これは、NHKが地域の視聴者の受信料や声などで支えら
れているということが一つの大きな理由です。地域の期待
に応え、地域との関係をどう築くか。これは、私たちの永
遠のテーマです。

私たちと同様のテーマを持っているプロスポーツがあり
ます。それは、サッカーのJリーグです。Jリーグは、活
動方針の中で「フェアで魅力的な試合を行うことで、地
域の人々に夢と楽しさを提供します」「地域の人々にJクラブ
をより身近に感じていただくため、(中略)選手や指導者が
地域の人々と交流を深める場や機会をつくっていきます」
などと謳っています。中でも、仙台市に本拠地を置き、今年、
7年ぶりのJ1への復帰を果たした「ベガルタ仙台」は、リ
グの中でも、屈指の観客動員数を誇り、熱烈なサポーター
が応援することで知られています。

そこで、「ベガルタ仙台」を率いる監督の手倉森誠さんに
「NHKの地域放送」を中心に話を伺いました。

スポーツ中継は、スマートかつシンプルに

——NHKは、ニュースやドキュメンタリー、それに、
バラエティーなどさまざまな番組を提供しています。ふだ
ん、NHKを視聴して、感じることはありませんか。

ドキュメンタリーは好きでよく見ます。ヌーの大群とか
ペンギンの生態を紹介した動物のドキュメンタリーやアマ
ゾンの暮らしなどの異文化を紹介するドキュメンタリーで
す。こうした番組を見ると、世界が広がり、「生きる」とい
うことに対して、考え方が豊かになるのです。

きのう（3月23日）は、『プロフェッショナル』でカズ（三浦知良・現・横浜FC）のドキュメンタリーを放送していただきましたよね。自分たちみたいな立場の人間は、何か伝えたいメッセージは必ずありますから、カズのカラーも伝わってきました。さらに、番組を見た人の中で、「サッカー選手になりたい」「カズみたいになりたい」っていう人が増えれば、サッカー界にとっても、いいことだと思います。

NHKのスポーツの取り上げ方は、僕は、スマートかつシンプルでいいと思っています。他局だと、芸能人が出てきたり、アイドルが出てきたり。そういう人のコメントを求めるほうが多くて、どうしても、第三者が絡むことが多い。一方、NHKの中継を見ると、局のアナウンサーが実況して、サッカーのプロの解説者が解説をしている。そのくらいのほうが正しいと思います。

地域に生かされているという意識

——ベガルタ仙台といえば、サポーターが熱心に応援していることで知られています。地域やサポーターとのかわりて工夫していることはありますか。

Jリーグの理念には、地域に密着したクラブづくりというのがあります。この理念に向かって、クラブが本気になって取り組まなければならないとき、まず、プレーしている選手に意識付けが必要です。このとき、僕が現場やフロントに常々話しているのは、「地域に生かされているという意識を持って活動していかなくやいけない」ということです。このクラブは、いろんな協力や資金援助があつて成り立っているし、自分たちが稼げることといえば、グッズ販売か競技場の入場料しかないわけです。いろいろな支援があるからこそ、クラブの運営自体が成り立っているのです。人

様のお金を使って自分たちが成り立っているという意識をクラブが持つこと、選手が持つことが大事だと思います。

そうすると、どういう気持ちで芽生えるかというと、感謝の気持ちしかないですよ。ね。「好きなサッカーをやらせてもらっている」「見に来てもらっている」っていう。それで、見に来てもらえれば、全力で戦うしかない。

それに加えて、サッカー選手としてサッカーだけプレーしていればいいというわけではなくて、やはり、地域から求められていることにも応えなくてはいけないと思います。試合に勝つことはもちろん、「選手たちとふれあいの場がほしい」となれば、そこに出向かないといけない。地域が必要としている活動を自分たちも率先してやらなくてはいい。社会的に、そういう立場にいるのだということを感じています。

——NHKも地域からの受信料収入で支えられています。

——地域に生かされているという意味では同じですか。そうだと思います。



試合だけではなく、選手個人を伝えてくれる

——いまのNHKは、ベガルタ仙台と地域・サポーターをつなぐというメディアとしての役割を果たせていると思いますか。

僕は、『てれまさむね』（午後6時台の宮城県ローカル）で毎週のように取り上げてもらっているのは、ありがたいと思っています。あの番組では、試合の結果を伝えるだけではなく、個人1人1人をスタジオに招いてもらっています。去年ですと、サーレス（選手）とかエリゼウ（選手）とかを取り上げてくれました。選手は、プレーしているところだけではなくて、パーソナリティーも商品だと思っていますので、パーソナリティーを取り上げてもらえるのはとてもありがたいのです。さらに、選手も、番組に出演することで、カメラの向こうの何万人もの人たちに向かって自分の考えを伝えるわけですから、教育されて成長していくのです。



ただ、去年の天皇杯

の準決勝で、NHKは、第1試合が延長になったために、第2試合の前半を放送できなかったことがあったかと思えます（第2試合は、ベガルタ仙台 VS S.ガンバ大阪）。ああいうのがたとえば、宮城や東北だけでも、前半から放送してもらえない工夫があると、地

域のサッカー熱が上がると思います。さらに、見ている人の中にも、「NHKはこうやって工夫して放送してくれた」と思ってくれる人が多くなるのではないかと思うのです。実は、僕自身も、試合の後に、奥さんに電話して、「録画できた？」と聞いたら、「録画できてない。第1試合が延長で長引いたから、ベガルタ仙台の放送は後半からだった」と聞いて、ちよつとショックでした。番組編成を工夫していただければと思いました。

地域放送をより多く、身近で明るい話題は元気をくれる

——地域放送にかかわる「公共放送・NHK」に求めることはありますか。

僕は、地域番組がもっともつとあつてもいいと思います。地域の活性化に関して、メディアの力は非常に大きいと思います。僕はメディアを通して、試合で勝っている姿、我々のドラマみたいなことを伝えられれば、地域の人たちに、感動を与えられる。こうしたところを取り上げて放送してほしい。また、違った角度から、地域の人たちがベガルタ仙台にどういったかわりをしているのか、取り上げてもらえれば、地域の人たちを盛り上げることに繋がると思っています。

中継については、これまでも、東北だけで何試合か取り上げてもらったこともありますが、ああいう形で東北だけでも中継してもらえれば、うれしいと思います。J1になると、全国放送してもらいたいという思いもありますが、「みちのくダービー」（東北地方に本拠地があるJリーグのチーム同士の対戦）である、「モンテディオ山形 VS.ベガルタ仙台」だったら、東北の中継でもいいと思うのです。

ただ、東北人は、中継されると、テレビですませよう、

わざわざ競技場まで行かなくてもいいやっという気質が多いですから(笑)。僕も東北人だけ(笑)。競技場まで来てもほしいし、テレビでも放送してもらいたいっていうことを考えると、その日の夜遅くでも、試合をまるごと放送してもらってもいいかなと思います(笑)。

もちろん、取り上げてもらうのは、プロスポーツだけではなくて、もっと、草の根の活動でもいいと思います。たとえば、将来目指していることだったり、スポーツ少年団だったり、小さな活動でも取り上げてあげてもらえれば、取り上げられた子供たちも成長すると思うのです。僕自身も子供の頃は、双子だというだけで、取り上げられました(笑)。僕は、テレビに取り上げてもらったら、その分、「がんばらなきゃ」ってがんばってきた(笑)。だから、未来の人たちをクローズアップしてほしいし、逆に、そちらからも元気をもらいたいというのがあります。

それと、僕自身は、ポジティブなほうなので、暗いニュースよりは、建設的で明るいニュースを伝えてくれることが望ましい。重大ニュースでなくても、地域の人たちの活躍を放送することは良いことだと思います。たとえば、地域の町おこしの活動を取り上げてもらえれば、ポジティブな放送になると思うのです。小さな団体が、大きな夢を膨らませて町おこしに取り組んでいる姿を見れば、メディアに



大きく取り上げられている人たちだって、「もつとがんばらなくては」って思うのではないのでしょうか。こうした小さな活動や成功を地域の中でもつと取り上げれば、地域がもつと活気づくのかなって思いますし、それは、メディアができることだと思っています。

インタビューを聞いて

Jリーグの開幕戦が始まったばかりで大事なスタートダッシュの時期にもかかわらず、手倉森さんは、気さくにインタビューに応じてくださいました。手倉森さんは、青森の出身で、かつて、山形のチームを指導していました。これは、インタビューの後で分かったことですが、そのときに山形局の取材を受け、人柄を含めて放送されたことがきっかけで、山形の人たちに受け入れられるようになった経験があるそうです。改めて、今回の「地域放送」を考えるインタビューにふさわしい方だったと思いました。

手倉森さんの「地域に生かされているということ意識して活動する」という言葉は、私たちの仕事にも通じると思います。地域の人たちは、NHKの取材対象であり、受信料という形でNHKを支えて下さっています。まさに、NHKは、地域に生かされているといえます。こうしたことを意識すれば、手倉森さんがおっしゃる通り、「感謝の気持ちが生え」、「好きな『放送に従事させて』もらっている」のだから、「全力で」取り組むということにつながるのではないのでしょうか。

報告 東北支部放送部長 渡辺 公介
同企画広報部長 遠藤 修